◆ 講 演

メキシコ伝統音楽ソン・ハローチョの変容と現在

増 田 耕 平

上映映画

Hilo Transparente（透明な糸）

時間：60分　制作年：2018年　制作国：メキシコ、日本

制作：ロス・ラギートス

監督：増田耕平

はじめに

本講演では、メキシコ合衆国東部、メキシコ湾岸のベラクルス州を中心に演奏される音楽「ソン・ハローチョ」について、1960〜70年代からの「ハラネロ[1]運動」（Movimiento jaranero）以降現在に至るまでの流れに焦点を当て、ドキュメンタリー映画の上映と解題に実演奏を加えて解説した。

講演会は3つの構成からなった。最初に、ソン・ハローチョとはいかなる音楽であるか、そして作中で語られるハラネロ運動以前の歴史について簡潔に説明した。続いて、ドキュメンタリー映画*Hilo Transparente*（透明な糸）を上映し、実際のハラネロ運動の当事者やその次の世代である音楽家らの証言を伝えた。最後に、作品に補足する形で解説を加え、ハラネロ運動から現在に至るまでのソン・ハローチョの姿について演奏を交えながら説明した。演奏は、日本でソン・ハローチョを広めることを目的として結成された任意団体であるロス・ラギートスが行った。

Ⅰ．ソン・ハローチョの特徴とハラネロ運動以前のソン・ハローチョ

1．基本情報

メキシコ合衆国は1億2619万人（2018年）［The World Bank 2019］という日本とほとんど同じ人口を、日本の約5倍の国土の中に持つ。名目GDPは約1兆2220億5300万US$で世界で15位につけている（2018年）［IMF 2019］。ラテンアメリカではブラジルに次ぐ2位であり、ラテンアメリカにおいては経済大国と位置づけることができる。失業率は約3.5％（2019年第2四半期）［OECD

2019］とそれほど高くはない。インフォーマル商業の従事者や零細農民らも含めての数字ではあるが、さほど悪くない、規模の大きな国であることはわかる。

日本との関係が深い国であるという側面もある。1888年に日墨修好通商航海条約を締結しており、これは日本にとって、アジア以外の国と結んだ初の平等条約であった。1897年には35人で構成される榎本植民団がメキシコに入植した。1906年には1000人近くの移民がベラクルス州南部にも入植した。彼らはアメリカ合衆国の経営するサトウキビ農園で働くために海を渡った。その後にも移民は何度か行われており、後に紹介するフリオ＝ミスミ・ゲレロ＝コヒマのルーツとなる。

1971年には日墨研修生・学生等交流計画が発足した。二国間の交換留学制度で、名前を変えて現在まで続いている。現在の名称は「日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修計画」である。毎年一年間の交換留学生を送る制度で、日本からは学生や公務員を中心とした30名ほどが毎年8月にメキシコへと渡る。筆者と、実演を行ったロス・ラギートスのメンバーの多くはこの交換留学制度を活用してメキシコへ渡り、ソン・ハローチョを学んでいる。

ベラクルス州はメキシコ合衆国のメキシコ湾側に位置する、北西から南東へと海沿いに細長く伸びた州である。東側には海が、西側には山脈がある。山脈を越えると、メキシコの人口の大部分が居住する高地がある。ベラクルス州、特にベラクルス港の近代の歴史は長い。先住民の歴史や文化まで記述すると冗長になってしまうので控えるが、ベラクルス港はエルナン・コルテスが新大陸を侵略する際に拠点を構えた場所である。大陸に置いた最初の拠点であるとされ、そこから現在のメキシコシティまでの道のりを確保した。1810年から始まった独立戦争では、ベラクルス港の対岸に築かれた要塞「サン・フアン・デ・ウルア」にスペイン軍が最後まで立てこもった。このように、スペインによる新大陸支配のはじめと終わりの場所として象徴的な意味のある場所でもある。

動乱の一方で、ベラクルス港は貿易港として重要な役割を果たしてきた。カリブ海地域との貿易の拠点として栄え、今でもメキシコ国内ではメキシコ湾側最大の港である。このような背景を持つ地で、ソン・ハローチョは形成され、実践されてきた。

2. ソン・ハローチョの特徴

ソン・ハローチョの楽器は、特殊なものから他地域でも多く使われるものまで様々である。中でも、ハラナ、レキント、タリマは欠かせない。ハラナは8弦5コースの伴奏用の弦楽器である。サイズは様々で、小さなものからモスキート、プリメラ、セグンダ、テルセラ、テルセロラと名前が付けられ、重層的に演奏される。レキントは4弦の弦楽器でメロディを奏でる。高音域を出すために作られたプンテアドールやベースの役割を持つレオナといった楽器もあり、これらはレキントの一種としてとらえられている。タリマはその上で踊るための木製の台である。ソン・ハローチョの踊り（サパテアード）では踵を踏み鳴らし、それが打楽器としての役割を持つ。踊りは演奏の一部であり、ソン・ハローチョの一つの特徴であろう。他にもアルパ（ハープ）、馬の下あごの骨を使ったキハーダ、革を張ったタンバリンであるパンデロ、指で金属の鍵盤を弾くマリンボル、バイオリンなどの楽器が用いられる。用いられる楽器には地域的特色があり、現代の

アレンジにおいてはさらに様々な楽器が取り入れられている。

今日、音楽において一般に認識されるであろう「曲」という概念は、本来ソン・ハローチョにはない。あるのは「ソン」と呼ばれる型である。ソンには、コード進行やリズム、主要メロディ、歌詞のテーマ、テンポなどが不文律で規定されており、ソンの共通認識をもとに集団的で即興的な演奏が繰り広げられる。ロックバージョンが有名になった『ラ・バンバ』という曲があるが、この原型はソン・ハローチョであり、同名のソンをアレンジしている。

ソンの共通認識をもとに演奏が繰り広げられる場が、ファンダンゴである。ファンダンゴとは、伝統的にソン・ハローチョが演奏される音楽の宴である。聖人の日などの祝祭に合わせて行われることもあるが、誕生日や葬式の場であったり、何かしらの理由を作ったりして日常的に開催される。ここでは、タリマと踊り手を囲って、何十人にもなる演奏者が一斉に演奏する。もちろん楽譜などはなく、共通して知っているソンのルールに従って演奏する。また、指揮者もいないが、タリマの音やリード奏者、歌などに合わせてテンポを調整する。踊り手も歌い手も次々と交代していく。リード奏者はレキントで、諸々の配慮もあるが、その場で最もうまい人がリード奏者として認められる。一つのソンは30分～1、2時間続き、その間、演奏も歌も踊りも自由に繰り広げられていく。

3. ハラネロ運動以前のソン・ハローチョ

ソン・ハローチョは16世紀にスペイン人がベラクルスに到達して以降、ヨーロッパ人（特にイベリア半島）、先住民、アフリカ人の文化が混淆して形成されてきたと言われている。ベラクルス港などの貿易の中心地に様々な文化が到来し、そこで形成された音楽がソン・ハローチョである。ただし、港は常に新しい文化の影響を受け続けたのに対し、その後背地であるベラクルス港以南の農村部においては特定の文化が定着し、ソン・ハローチョが継承されていった。

ソン・ハローチョが公式記録[2]に初めて登場したのは1766年である（このときまだソン・ハローチョという呼称はなかったが）。「エル・チュチュンベ」（El chuchumbé）というソンが異端審問によって禁止されたためである。このソンでは、へそとへそとをすり合わせる官能的な踊りが行われていたことが理由であるとされている。被支配者層の団結を避けたいという思惑もあり、他にもいくつかのソンが禁止されていった。

1810年、メキシコは国として独立した。独立後、国・地域としての文化の確立が求められる中で、ソン・ハローチョは一転してベラクルスを象徴する音楽として認められるようになっていった。さらに20世紀に入ると、マスメディアによってソン・ハローチョが切り取られるようになった。ラジオやレコード、映画などによって全国的に取り上げられるようになり、この時期に、「ソン・ハローチョ」という呼称が定着した。また、音楽のあり方に変化が加えられた。録音や放送の尺に合わせて、ファンダンゴでは30分～1、2時間演奏していたソンを一つの曲として2、3分に編曲したり、映像でのインパクトのためにアルパが巨大化したりした。もともとベラクルスで演奏される伝統的なアルパは、高さ1mほどの座って弾くサイズのもので、現在「アルパ」として認識されているものとは違うものである。また、真っ白な「民族衣装」のイメージも付与され、ソン・ハローチョといえばアルパと白い衣装というビジュアルイメージが形成された。

大々的にソン・ハローチョが取り上げられることによって、認知度は高まり、ベラクルス出身の音楽家がメキシコシティなどに出て演奏する機会も増えることとなった。しかし、有名曲の演奏ばかりを求められたり、大衆受けするように構成が固定されたりしたため、都市でのソン・ハローチョは本来の姿を伝えることなく、また長続きもしなかった。

これらの背景から、1960〜70年代にハラネロ運動が始まった。「伝統」をキーワードとし、農村部に継承されているソン・ハローチョを探求し、それを広げていった。中心的な役割を担ったのがヒルベルト・グティエレス＝シルバと彼のバンド「モノ・ブランコ」(Mono blanco) である。彼らは、商業的活動としてのコンサートよりも、演奏の場、継承の場としてのファンダンゴを重視して広めていった。

Ⅱ．ドキュメンタリー映画 *Hilo Transparente* 上映

上映したのは、筆者による2018年完成の作品である。ベラクルス各地の音楽家のもとを訪れ、彼らの生活の中での音楽のあり方や、その伝承の方法について語ってもらった内容を収めた。ハラネロ運動とその継続的な影響と成果を、現在のメキシコシティで展開される若者たちによるソン・ハローチョの新しい実践活動と結び付けている。本作品はウェブ上[3]で無料公開されているが、大まかな内容を紹介しておく。

都市におけるソン・ハローチョ

現代のメキシコシティにおいては、ソン・ハローチョをアレンジしたバンドがいくつも生まれており、その一つ「セミージャ」(Semilla) のハラナ奏者アリ・メドラーノにインタビューした。彼は、メキシコシティの若者としてソン・ハローチョに新しいアレンジを取り入れていくが、その根幹として、ソン・ハローチョのルーツを学ぶことを重視していると語る。

ハラネロ運動

モノ・ブランコのリーダーで、ハラネロ運動を牽引してきたヒルベルト・グティエレスにインタビューした。ソン・ハローチョとの出会いや、グループの結成、伝統の再発見の過程、優れた老齢の音楽家からの学び、ソン・ハローチョのあるべき姿、すなわち、現在のような広がりをみせて変容していっても、伝統を継承していくことの必要性などについて語った。

伝統的音楽家

過去にはモノ・ブランコの一員として演奏し、今はリタイアして故郷で暮らすアンドレス・ベガと、山奥の農村でとうもろこしを育てながら脈々と演奏を続けるフェリックスとアルカディオのバクシン兄弟にインタビューした。アンドレス・ベガはずっと農村で農業を営みながら演奏していたが、ヒルベルトに連れられて音楽家としても成功することとなった。自身の音楽のルーツについて聞くと、父親に教えられたと語り、彼から習った型を披露してくれた。また、かつてはファンダンゴが盛んに行われており、それが農作業後の楽しみだったという。

フェリックスは父親や叔父に教えられてソン・ハローチョを学んだ。教えられたものは音楽と農業で、その二つを守り抜いていくという。アルカディオも父からハラナを習ったという。どちらもファンダンゴについて興味深いエピソードを披露してくれた。フェリックスはファンダンゴは明文化されてないルールによって成り立っていたと言い、アルカディオは地域で集まって環境改善をするときにファンダンゴが開かれていたと語った。

教育者

青少年を対象に音楽教育を実践しているフリオ＝セサル・コロ＝ララとミスミ・コヒマにインタビューした。フリオ・コロはトラコタルパンという小さいがソン・ハローチョの文化的中心の一つである村で、楽器職人と音楽家として働いている。特に楽器職人として多くの弟子を送り出しており、ハラネロ運動で変わったのは演奏だけではなく、楽器つくりも変わったのだと胸を張る。ミスミ・コヒマはオタティトランという小さな村でソン・ハローチョを再興し、今は青少年を対象に音楽を通した統合的な教育を実践している。ミスミの指導を受けた生徒の一人であるノエ・ゲレロ＝ポンティゴは、今後も音楽を続けていきたいと語る。

都市におけるソン・ハローチョ（再度）

再度、アリ・メドラーノのインタビューに移る。伝統を振り返ることの大切さとソン・ハローチョの今後の発展について語る。

Ⅲ．ドキュメンタリー解説

本作品は、自主制作によるもので、2017年4月から2018年5月にかけて制作された。撮影期間は2017年9月から2018年1月であった。音楽家の語りから構成されており、生の声が伝わるよう、極力作る側の言葉を入れないようにしている。

1．ヒルベルト・グティエレスとハラネロ運動

ヒルベルト・グティエレスはハラネロ運動を主導してきた人物である。トレス・サポーテスというベラクルスの農村に生まれるが、若くから親元を離れ、親戚の家などを転々とする生活をしていた。16歳で独立し、メキシコシティに引っ越した。昔は特別興味があったわけではないものの、メキシコシティでソン・ハローチョの可能性に気づき、1977年にモノ・ブランコを結成した。ハラネロ運動においては、忘れさられかけていた伝統的なソン・ハローチョの探求、老齢の音楽家との演奏と彼らからの学びの継承、ワークショップ、キャンプ、楽器制作などを通じた次世代への継承といった活動を展開した。

伝統的ソン・ハローチョを探求し、老齢の音楽家と演奏したヒルベルトであるが、その中でも有名な音楽家二人がアルカディオ・イダルゴとアンドレス・ベガである。アルカディオ・イダルゴはハラネロ運動以前にソン・ハローチョの歌手として有名になった人物であった。すでに非常に高齢であったがモノ・ブランコとともに演奏し、ヒルベルトに様々な教えを授けた。すでに

1985年に他界している。アンドレス・ベガはレキント奏者で、長年モノ・ブランコの一員として演奏してきた。彼の一家は優れた音楽家を輩出しており、3人の息子はそれぞれ別のバンドで主要な役割を担っていた。その一人のオクタビオ・ベガはモノ・ブランコの一員としてレキントやアルパを演奏し、長年モノ・ブランコのメロディを担っている。今となっては有名な二人であるが、現在広く認知されているのはヒルベルトとの演奏があったからであろう。

ハラネロ運動において、「ソン・ハローチョ・ブランコ」と呼ばれるソン・ハローチョのスタイルは対立的な位置づけをされる。これは、20世紀初頭にメディアなどを通じて形成されたスタイルで、白い衣装を纏うことから「ソン・ハローチョ・ブランコ」、すなわち「白いソン・ハローチョ」と呼ばれる。商業的な成功に傾倒していることを揶揄して「ソン・ハローチョ・コメルシアル」、すなわち「商業的ソン・ハローチョ」と呼ばれることもある。これが批判される理由としては、伝統的なソン・ハローチョに基づいていないこと、音楽ではなくビジュアルを重視していることなどが挙げられる。これに対して、伝統に基づくことを重視したのがハラネロ運動であり、「ソン・ハローチョ・トラディシオナル」と呼ばれることもある。ただし、ハラネロ運動の結果としてソン・ハローチョは多様化しており、単純に対置して二分化できるものではなくなってきている。例えば、モノ・ブランコも商業的に成功しているという批判や、ソン・ハローチョ・ブランコの音楽家が伝統的ソン・ハローチョの広がりに果たした役割の見直しも指摘されている。ただし、いまだに「メキシコ伝統音楽」として海外に向けられるソン・ハローチョはソン・ハローチョ・ブランコが主であり、その多様性を欠いていることは事実であろう。

2. ミスミ・コヒマと「ハルディン・コヒマ」

ミスミ・コヒマはオタティトランというベラクルス州の村に生まれ育ち、現在はそこで幼稚園の園長をしている。20世紀初めにベラクルスに移り住んできた日系人の子孫で、自身は日系4世である。生まれ育ったオタティトランではソン・ハローチョの文化が廃れてしまっていたが、学生時代に住んでいたトラコタルパンでソン・ハローチョに出会い、学び始めた。作中に登場したフェリックスとアルカディオのバクシン兄弟らとともに演奏し、彼らから音楽を学んだ。また、ヒルベルトの開催するキャンプにも参加し、彼からも学んだ。一時期、モノ・ブランコに加わっていた時期もある。

しばらくして故郷のオタティトランに教職のポストが見つかり、帰郷することとなった。そこで、本職の他にソン・ハローチョを通した統合教育のプロジェクトを始めた。彼の母親（姓はコヒマ）の家の庭を使ったので、そのプロジェクトを「ハルディン・コヒマ」（コヒマ家の庭）と名付けた。コヒマ（Kojima、すなわちコジマのスペイン語読み）という姓を用いたのは、自分のルーツへの意識があったという。ハルディン・コヒマでは、音楽だけでなく、特に環境問題について、子どもたちの意識を変えることに取り組んだ。効果が大きかったのが、プラスチックごみ回収であった。村中のプラスチックごみを子どもたちに集めさせ、授業料などは取らずに、それを売って運営費に当てたのである。かつては路上はごみで溢れていたというが、現在はほとんどごみは落ちていない。

3. 都市におけるソン・ハローチョ

ソン・ハローチョはベラクルス州の州都ハラパやメキシコシティといった都市でも広がりを見せている。いくつものバンドが生まれ、アメリカ合衆国を中心として海外にも演奏機会を広げている。本作品ではメキシコシティのバンドであるセミージャを入り口としているが、これは海外から興味を持つ人は、都市的アレンジをされた音楽を先に聴くであろうという考えから設定している。

メキシコシティやハラパでは、様々な活動が展開されている。文化センターや公園ではワークショップが開催され、老若男女が演奏を学びに集まる。バンドのコンサートも開催され、これは美術館・博物館、大学といった公的な場所から、バーやライブハウスといった都会的な場所まである。ワークショップやコンサートの後にはファンダンゴが開かれることもある。ハラネロのコミュニティがあり、ファンダンゴは広い家の庭などでもよく開催される。本場ベラクルスから音楽家が来ることもあり、その際はコンサートやワークショップ、ファンダンゴが催される。

都市と農村とは対置されがちであるが、実際には人が往来し、互いにスタイルを持って音楽を実践している。ソン・ハローチョ・ブランコの中心も都市であるし、ハラネロ運動が始まった契機も、ヒルベルトのメキシコシティでの経験が基であると言えなくもない。

4. 海外への広がり

作中では登場しなかったが、アリ・メドラーノがソン・ハローチョの海外への広がりに言及した。その一例として2019年3月に見てきたロサンゼルスでのソン・ハローチョの実践を紹介する。ロサンゼルスでは、メキシコ系アメリカ人の人口が多く、彼らの居住地区が点在する。マイノリティでもある彼らは文化的結束によって地域の課題を改善しようとするのだが、そこで実践されているのがソン・ハローチョである。ワークショップやファンダンゴといったソン・ハローチョの参加型の側面に着目し、地域の人々が集まって自らの文化を学ぶ素材として活用されているのである。

ロサンゼルス東部のイーストサイド・カフェには毎週一回夜に自主的に参加者が集まる。毎回一人が今週のソンを調べてきて、歌詞などを共有する。その歌詞を使って、教えられる人が教えながら全員で演奏する。郊外のサンタアナでは、ヒスパニック人口が大半だという。そこでは、メキシコやラテンアメリカに所縁のない白人男性もメキシコの文化を知るために参加していた。

このように、双方向性があり多数が参加できる音楽として、ソン・ハローチョが活用されている。これはロサンゼルスの事例であるが、サンフランシスコやシアトルといった都市でも同様の活動は広がっているらしい。

おわりに

本講演では、ドキュメンタリー映画を素材として用い、ハラネロ運動から現在に至るメキシコ合衆国の伝統音楽「ソン・ハローチョ」の動きを説明した。本講演が多様なメキシコ音楽の一端としてのソン・ハローチョの理解とさらなる興味につながれば幸いである。

〈註〉

1　ハラネロとは、ソン・ハローチョの演奏家のことである。

2　異端審問の記録にチュチュンベというソンを禁止したと記述されている。

3　https://www.youtube.com/watch?v=SSKYRdJRJEU&t=338s

〈参考文献〉

外務省、2019、「メキシコ合衆国（United Mexican States）基礎データ」。
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mexico/data.html#section2（2019年11月3日閲覧）

García de León Griego, Antonio. 2006. *Fandango: El ritual del mundo jarocho a través de los siglos*, México: Conaculta.

Hernández Galindo, Sergio. April 2nd, 2019. “Julio Mizzumi Guerrero Kojima: A Jarocho Nikkei Searching for His Many Roots” *Discover Nikkei*. (Translated by Kora McNaughton)
http://www.discovernikkei.org/en/journal/2019/4/2/julio-mizzumi-1/ (November 3, 2019)

IMF. 2019. “World Economic Outlook Database”.
https://www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2019/01/weodata/index.aspx

OECD. 2019. “Unemployment rate” *OECD Data*.
https://data.oecd.org/unemp/unemployment-rate.htm

The World Bank. 2019. “Population Ranking”.
https://datacatalog.worldbank.org/dataset/population-ranking

（ますだ　こうへい　音楽家、自主映画監督）